

平成 25 年度 第 2 回文化芸術に関する意見交換会

- 1 日 時 平成 26 年 1 月 21 日（火）10 時 00 分から 12 時 00 分
- 2 会 場 さいたま市役所議会棟 2 階 第 7 委員会室
- 3 出席者
 - (1) 委員（11 名）
石上城行、三須康男、五十嵐健一、井藤仁、大久保佐貴玖、おかべりか、小林正太郎、
齊藤茂、宮本智子、村木益実、山口聖子
 - (2) 事務局（6 名）
市民・スポーツ文化局スポーツ文化部 川島部長、金子次長
文化振興課 大西課長、織田課長補佐、高橋主査、横溝主任
- 4 公開・非公開の別 公 開
- 5 傍聴人の数 1 名
- 6 内 容
 - (1) 開会
 - (2) 挨拶
 - (3) 意見交換
 - ①さいたま市文化芸術都市創造計画（素案）について
 - (4) その他
 - ・さいたま市文化芸術都市創造計画（素案）に対するパブリックコメント制度による意見募集を実施中（1 月 6 日～2 月 5 日）
 - ・本日の会議結果は公開することとし、会議録及び会議の開催結果を事務局にて作成し、各区情報公開コーナーでの閲覧、さいたま市ホームページへ掲載を行う旨を説明。
 - (5) 閉 会

会 議 記 録

<資料説明>

事務局 「さいたま市文化芸術都市創造計画（素案）概要版」、「(仮称)さいたまトリエンナーレ基本構想骨子（案）【概要】」を説明

○石上委員長 説明が終わりました。意見交換を行いたいと思います。ご意見がある方は挙手をお願いします。

本日は、まず全体に関するご意見をいただきたいと思います。その後、計画を進めるに当たって、具体的にこういうことがあったほうがいいのか、ここが足りないのではないかということなどについてのご意見をいただきたいと思います。

○三須副委員長 大きな話になる前に、少し事務的な視点になるかもしれませんが、素案の作成お疲れさまです。別紙の資料を見ますと、幅広い分野との連携と関係団体等との連携、地域経済の活性化と産業振興への配慮といったことが、最初は施策の一つの位置づけに入っていたものが、きちんと横串で、施策を実行する上での視点ということで盛り込んでいただいています。施策を実行する段階においても、このような視点に基づき、それぞれの事業を展開していただきたいと思いました。

また、計画の推進に当たっては、有識者会議を設けるということですね。今の審議会とは別の、進行管理を行うための審議会となるのでしょうか。検証を第三者にってもらうことは重要だと思いますが、それ以上に、それぞれの担当部署が実行して、どこに具体的な成果があったのかというような自己点検をした上で、検証に進んでいただければいいのかなと思いました。

○石上委員長 他にいかがでしょうか。

○齊藤委員 今までにこの意見交換会で話していたことよりも具体的になったと思います。「トリエンナーレ」とも言っていますから、非常に具体的なものが提示されると感じます。言葉自体が浸透しているかどうかは別として、「トリエンナーレ」という言葉で、3年に1回行うということが分かります。既に日本の幾つかの都市でトリエンナーレを開催していますから、ある部分は浸透していると思います。

開催期間を100日とするのは、美術的な展示を中心とするトリエンナーレという意味でしょうか。この会議で、検討する内容ではないかもしれませんが、この計画案からは、まだ理解できません。また、国際的な発信をしたいとおっしゃるのは、どのようなジャンルのものを提起しようとしているのか、音楽はどうなのか、そこが、この計画からは見えないと感じました。

○石上委員長 恐らく、今日は、トリエンナーレが気になるだろうと私も思っていたのですが、一応、読むと、作品展示や公演とありますので、舞台芸術も含まれていると理解できるかと思います。その辺はいかがですか。もう少し補足的に説明していただいてもよろしいでしょうか。

○事務局 現時点では、詳しいことはまだ何も決まっています。先進都市の例を見ますと、現代アートの展示が中心となっており、そのほかにも舞台芸術等を展開している例も見られます。ご指摘いただいた100日という件ですが、先進地でのインタビューあるいは有識者の方々からご意見をいただいた中で、100日程度あれば、口コミ効果でお客さんもくるだろうというお話がありましたので、そのご意見を参考に設定しています。今後、具体的な開催日数や開催時期については、芸術監督、準備委員会等の中で協議して、決定していくことになろうかと思えます。

それから、何を発信していくのかということですが、この点につきましても詳しいことは決まっています。ですから、皆様方から、こうした点について、ご意見をいただけると大変ありがたいと思えます。

○石上委員長 こういうトリエンナーレやビエンナーレというのは、芸術監督のイニシアチブで大きく変わる傾向があります。過去には、決まっていた監督が突然降りてしまい、急きよ、参加する予定だったアーティストが引き継ぎ、アーティスト主体のトリエンナーレが開催されたことがありました。

今回、この資料にトリエンナーレの基本構想骨子(案)が出てきたので、皆さん興味を惹かれるとは思いますが、トリエンナーレの詳しい内容をこの意見交換会で議論するのは、もしかしたら少し違うのかもしれないと感じます。

○事務局 少し違うかもしれません。

○石上委員長 このトリエンナーレという事業は、あくまでも文化芸術都市創造計画の重点プロジェクトの中の一つの取組ということですので、全体的な部分でいろいろなご意見が出るというのかなと感じております。

今回の資料の計画概要版別紙のところに、具体的な取組として、「拡大」や「新規」という事業があります。ここに、これまで議論してきたことの方向性といえますか、性格づけが少し強く出てきているのではないかと感じています。基本施策も出ていますので、このあたりに関するご意見をいただきたいと思えます。

○おかべ委員 今、考えたことがあるので、忘れないうちにお話ししたいと思います。

川口駅の近くに「アートギャラリー・アトリア」という市立の施設がありまして、そこの催し物で、「川口の匠」というシリーズの展示を拝見しました。川口の美術館は収蔵品がない美術館で、その代わりにいろいろな試みを展開しています。浦和の人間としては、少し悔しいようなところがあるので、敵情視察に行ってきました。そうしたら、今回の「川口の匠」は、リコーダーの職人さん、バイオリンづくりの職人さん、尺八づくりの職人さん、それから、打楽器のスティック・マレット、ばちなどといった、川口の職人さんたちの技術に関する展示でした。ティンパニから、ビブラフォンから何から、大変な数のばちを製作している職人さんがいて、しかも、世界に名だたる日本のアーティストが注文して、僕は今度こういう曲を演奏したいけど、それに合うマレットをつくってくれないかと頼むと、任せてくださいとつくってしまうような、そんな職人さんがいるわけで

す。このようなことを今度の展示で知りまして、作品をつくる人、演奏する人といった芸術家だけではなく、それを支える職人さんの技術が本当に大切で、そういう職人さんがいなければバイオリンの弓もつくれなければ、ティンパニをたたくこともできないし、とにかくいろいろな職人さんあっての芸術ということがよく分かりました。今回の具体的な取組の中に、芸術家、アーティストとはありますが、一步進んで、それを支える人たちの技術という視点があれば、それこそ、さいたま市でなければできないことが活かせるのではないかと思います。

さいたま市には、額縁をつくる大変な名人がいらっしゃいますし、また、剣道の武具をつくる、ものすごく腕のいい方もいらっしゃいます。そういう方々は、表に出たりすることはお好きではない方だと思いますが、その人たちの後継者を育てる、そういう視点があってこそその芸術であり、上面だけではない感覚を私たちが日々、新たに更新し、人の営みというものを、芸術を通じて感じることで、自分の考えを深めていくためにも、そういう視点がすごく必要だと思います。人材以外に、職人さんの世界、支える技術の世界に光を当てることも大事ではないかと思います。

○石上委員長　ありがとうございます。幅広い人材育成という視点ですね。その他いかがでしょうか。

○宮本委員　今回、この計画案を拝見させていただいて、本当によくまとめてあると思います。時代に合った最適な発信をしていくところにコンセプトがあると思いますが、その前に、日本の伝統的な文化芸術を世界に広げていけないのかなという感じがします。

計画の施策に文化芸術に対する子どもの感性の向上とありますが、これに関連することとして、近年、昔からの童謡、唱歌が失われつつあると感じています。今、私は大学で授業を教えています。昔からの童謡を知らないという学生が多くいます。これは非常にさびしいことで、このような文化を継承していくため、普及活動を中心にしたコンサート等も開かれるべきではないかと思います。その場合、いろいろな文化芸術とコラボレーションして行うと非常に効果的かと思います。

例えば、童謡を歌う岩槻の人形などは如何かなと。今、対話型の人形がありまして、私は趣味で持っていますが、非常に優れています。まず朝の挨拶から始まって、ことわざも分かりますし、英語も話します。このような人形は、少子高齢化社会にはうってつけの、本当にすばらしい、ノーベル賞ものだと私は思っています。それを見たときに、岩槻の人形にこれを応用できるのではないかと思います。もちろん、見たままでもすばらしい人形ですが、そこに少し手を加えて、コンサート会場などに、歌う人形として置いてみたりするのも、意外性があっておもしろいのかなと思います。

○石上委員長　人形の話が出ましたが、いかがでしょうか。

○井藤委員　大いに参考にさせていただきたいと思います。

今、人形は、歌うとか話すとか動くなどのからくりにも取り組んでいます。昔からからくりはあったのですが、今様の動きを取り込んだ人形ということで、業界でもそういったところにも目を向けています。今、具体的にそういう話は進んではいませんが、歌う、話すというのは、面白いとっていて、今後、やってみたいと思います。

それと、全般的なこと、具体的なことでもよろしいですか。

○石上委員長 どうぞ。

○井藤委員 この計画の3つの重点プロジェクトの一つ文化芸術活動を支える人材の育成とありますが、この育成の対象についてはどのようにお考えでしょうか。幼い子どもから大人までということだとあまりにも広がってしまうので、対象を絞って展開していくべきではないかと思えます。

また、様々な事業を進めていくには、少し生臭い話にはなりますが、何といてもお金の問題が出てくるかと思えます。「計画の推進」に文化基金という記載がありますが、今、基金残高はどのくらいあるのでしょうか。それから、企業からの寄付金等の受け皿にもなるということですが、もう少し内容について教えていただけますでしょうか。

○石上委員長 基金についてはいかがでしょうか。

○事務局 既存の基金は、記載してありますとおり、文化財産等取得基金ということで、使う目的が、美術品や芸術作品の購入で、盆栽も含まれます。それぞれうらわ美術館の収蔵品であるとか、盆栽美術館の収蔵品、そういうものを購入するために積んである基金で、基金残高としては3億円くらいあります。ただ、現在、積立てをしているわけではありませぬので、徐々に減っている状況にあります。この基金を、文化芸術事業にも使えるような基金に見直したものが新たな文化基金というものです。

これは、いずれトリエンナーレなどの大規模事業を実施するに当たり、企業からの協賛金や市民からの寄付金等、そうしたものの受け皿となるような基金につくり変えていきたいと考えております。

○石上委員長 そういうことで、よろしいでしょうか。

最初にご質問のあった人材育成についてですが、施策1の企画・運営に関わる人材の育成、施策5の漫画文化にかかわる人材の育成という取組が位置付けられています。また、人材等の情報収集・提供といった取組もありますので、こうした取組を見ていただいて、具体的に、人材の育成に関するアイデアがありましたら、ご意見をいただければと思います。例えば、人形産業全体という視点で見た場合、いろいろな可能性がある、または、今は不足している部分があるのかなという気もしています。

○井藤委員 今、お節句文化が、若い人たちの中でどんどん薄れている、関心が薄くなって

いるという事実があります。我々の業界としては、多くの人に関心を持ってもらうため、さまざまな活動を展開していますが、このような活動も押し返されてしまうような状況にあります。ですから、幼いころから、このような文化の大切さ、本来の意味合いを教えていかないと人形文化の振興は無理なのかなと思います。やはり小さいころから教える、対象もそういうところに重点を置くべきではないかと思っています。

○石上委員長　具体的に言うと、やはり学校教育や幼稚園などともっと積極的に連携していくということですね。

○井藤委員　はい。やはり小さいうちから人形に触れ合う機会を提供し、そういうものに関心を持たせるというか、いくら構想を立てても、人ごとのようになってしまうのでは何もならない。それに関心を持ち、おもしろみを分かってもらえるような人材を育てないと、盛り上がってこないのではないかと思います。

○事務局　今、井藤委員さんからお話がありましたように、子どもに対する人材育成という観点から申しますと、小学生・中学生を対象とする管楽器・打楽器の独奏コンテストであるジュニアソロコンテストを実施しています。今、井藤委員がおっしゃったような、子どもの頃から、そういう感性を植えつけていくといえますか、文化芸術と触れ合う機会を増やしていくことは重要であると考えております。

○井藤委員　今の関連でお話をしますと、現在、岩槻人形協同組合というものがあって、ここを中心に、毎年、学校で出前講座を開いています。これは経済産業省の補助事業でもあるのですが、毎年5校くらいで開催し、おおむね500～600人くらいが参加しています。このような講座を通じて関心を持ってもらうのもいいのですが、それをもっと当事者ではなくて、第三者的なところから進めていくと効果があるのかなと思っています。

○石上委員長　ありがとうございます。
先ほどの宮本委員のお話ですと、音楽の視点がありました。山口委員、何かご意見がありますか。

○山口委員　子どもの歌唱教育という面ですと、私自身が行っているのは、子どもころから他国語で歌わせることです。子どもは小さい頃ほど耳が良いということなので、他国の言葉で、一つの歌を歌い替えるというものです。子どもは、ドイツ語、イタリア語、フランス語であろうとほとんど抵抗はありません。例えば「きらきら星」を、リズムで教えるなどしますが、それを展開していくと、10カ国語くらいで歌えるようになります。

極めて個人的なことですが、この1年ほどは2カ月おきにヨーロッパと行き来する生活をしています。こうした機会を生かして、音楽鑑賞や美術館をめぐるたりしています。

昨年は、ワーグナーとヴェルディの生誕200年ということでしたが、ワーグナーが立ち上げた、大変長い歴史があるバイロイト音楽祭というドイツの音楽祭があります。この音楽祭は、オペラの演出が斬新で有名だということで、世界中からバイロイトの田舎まちに集まってきます。こうした催し物の場合は観客動員が大変重要なことかと思いますが、そのときにお話しをしたドイツ人は、3年間待ったと言っていましたし、苦勞してチケットを入手した日本人の方もいらしていました。

経営的には大変になった時期もあったようですが、現在は、州なども協力している音楽祭になり、とにかく盛況と聞いています。このような音楽会やオペラ、システィーナ礼拝堂やバチカンもちろんそうですが、そこにある絶対価値、存在感があると、世界中から人がやって来る。こうした存在感をどのように示していくかということも大事なことかと思えます。

日本だと金沢の21世紀美術館は観客動員がいいというようなお話を聞きました。さいたま市の中にある何か絶対的な価値のあるものや、潜在的なものを知ってもらい、世界中から人を集める方法はないものかと感じました。

○石上委員長　ヨーロッパの文化政策は、EUになってからすごく変わったらしいです。パリなど、既存のコンテンツがある場所ではなく、わりとそういうものがない田舎まちで国際的な規模のコンペが企画されています。そして、そこにグレードの高い人が集まる状況をつくり、多くの人に来てもらい、まちを活性化する。だから、コンテンツがあるところはそれを生かして、ないところは国際展を行うといった、何か棲み分けがあるように感じています。

そういう意味では、さいたま市はちょうどいいかなという気がしています。東京と連携して開催すれば、東京にも行けるし、さいたま市でも国際的でレベルの高いものが見ることができる。ヨーロッパは、やはりおもしろかったですか。

○山口委員　おもしろかったです。ミラノではスカラ座をはじめ美術館など、いろいろと見ることができますし、ヴェルディの生家がある田舎のまちでも、多くの人が集まり、まちの活性化につながっていました。こうしたまちと比べるとさいたま市は大都市ですから。

○石上委員長　大都市ですか。

○山口委員　はい、大都市です。

○齊藤委員　さいたま市は、人口125万人を擁する日本の中でも有数の都市です。そのような都市がその名前を発信できていないということは、あり得ないのではないかと思います。

この計画は、極めて綿密に記載されていて感心するのですが、全てを網羅している。全てを網羅し、全部に手をつけるのかということ、それは難しいですね。既にさいたま市のいろいろな場所で、人形や漫画など、積み上げてきているものがあります。今までの伝統を積み上げてそのまま進んでいくという視点だけでは

なく、新たに何をつくるという話をしていけないといけないと思います。

例えば、山口委員がおっしゃっていたような、バイロイト音楽祭などは、ベルリンの芸術週間など、一定の長い歴史で構築してきたもので、盆栽と同じです。長い歴史でつくられた音楽祭であって、それはもう産業になっているわけです。音楽祭を行うこと、芸術祭を開催することが産業です。こうしたイベントは、十分その周辺にいろいろな仕事、雇用を生み出します。そういう意味合いを考えながら、さいたま市は展開したほうがいいのではないかと思います。

トリエンナーレを現代美術展とおっしゃっていましたが、創造ということから言うと、志は高邁ですが、人を集めることができるかという疑問に思います。今の時代に生きて、東京とも張り合っさいたま市という名前をきちんと確立したいのであれば、やはりどういうものを開催して、注目を集め、人を呼びこめるのかということが重要だと思います。

例えばルール音楽祭は、産業遺産を活用してオペラを上演します。さらに、その音楽祭そのものを新たな産業にしています。

このようなプロジェクトを企画して進めていくと思いますが、我々意見交換会としても、東京から人をさいたま市に呼び込むものを打ち出していければと思います。

基本構想骨子（案）を見ると、トリエンナーレのスケジュールが見事に組まれています。仮に平成 28 年の 5 月ころに開催するとなれば 2 年と少ししかありません。十分な準備期間があるような感じもしますが、そんなことはなくて、実を言うと、今から 5 月くらいまでが勝負ではないかと思います。そこまで芸術監督を決めることができ、しかも、交渉が始まれば、その後の 1 年は別にそれほど大変ではないかもしれません。仮に芸術家を招聘しようと思ったら、2 年前には決まらなと彼らも動けません。ヨーロッパやアジアの人たちも、さいたま市に来ようと思っても、そのスケジューリングができないと思います。ということは、平成 28 年のトリエンナーレは、極めて時間がないと自覚して進めたほうがよろしいかと思います。

○石上委員長 今、齊藤委員が前段でおっしゃったお話は、施策 5 と関連した話かと思います。施策 5 の詳細を素案の冊子のほうで見ると、密度のばらつきがあるかなという気がします。盆栽などを見ると、項目が 3 つあって充実している気がしますが、漫画、人形、鉄道は 2 つですね。

また、施策 5 は、文化芸術資源の発掘・保護・活用ということですので、恐らく、ここを掘り下げていくと、新しい発信につながるのではないかと思います。

○大久保委員 トリエンナーレということは、先進的、多面的、総合的な文化芸術を体験できる国際芸術祭の開催ということだと思いますが、インターナショナルだと何でもありということになってしまう。そうすると、今度、インターナショナルに対して、さいたまのローカルなものが相いれないということはないですが、インターナショナルな色彩を出そうとすると、ローカルな色彩をそこにどう出して融合させていくかということが一番大きな課題になってくると思います。

○石上委員長　　今、インターナショナルといったときに、考え方がだいぶ変わってきているのではないかと思います。むしろ、ローカリティを強く出し合うようなことが、本来のグローバルな時代のインターナショナルな取組と言えると思うのです。

○大久保委員　　その辺をうまく融合して、理想的なインターナショナル性を出せばいいなと思っています。

○宮本委員　　ある中国の方は、日本の「夏の思い出」という曲を聴いたときに、言い知れぬ郷愁を覚えたということで、日本にいらして、日本で日本の歌を学んで、今は大変活躍なさっているようです。今では、童謡の普及活動のようなことを積極的に行っているらしいです。ですから、外国の方が共感を覚えるものを、自信を持って出さない手はないと思います。世界に発信しない手はないと思いますので、ローカルになるか、世界的なものになるかというのは、発信の仕方だと思います。

それから、先ほど、山口委員から、子どもたちにいろいろな国の言葉で童謡を歌わせているというお話がありました。これも非常に面白い試みかと思っています。最近、日本語をきれいに歌うことができない子どもたちが多いです。まず、鼻濁音ができない。これは、今の若者も、いろいろな音楽がありますが、そうしたところで、「○○が」といったものも「ガッ」と歌っていますね。それはそれでいいのですが、やはり日本の伝統的な音楽はきれいな日本語で、美しく歌うことが大切であり、そこから始まるのかなと思います。このような発信もしていかなければいけないのかなと思っていまして、今回は研究紀要もそれで書かせていただきました。

○齊藤委員　　今のお話に関連するかもしれませんが、さいたま市に世界中の子ども合唱団を呼んで、日本の合唱団と交流をするイベントを企画して、世界の子どもたちや親たちにツアーを組んで日本に来てもらってはどうか。「何とか人を動かしたい」、「さいたま市という名前を世界に浸透させたい」ということであるならば、このような交流もありかなと思います。

さらに言えば、人材の育成や教育に関連するお話として、去年、私は甲府市で「第九」を行い、300人くらい集まりました。「第九」は、既にさんざん演奏されてきていますが、市民が2年間一生懸命に練習をして、最後はすごく感動がありました。「第九」は、ベートーベン、ドイツですが、もはや日本人にとって、日本の伝統と言えるくらいに市民に浸透しています。既にある楽曲、世界のどこでも構わないのですが、楽曲をてこに市民を集め、演奏活動を行う。このような活動を続けるには、運営も考えなければならない。つまり、そこで人材育成や教育ができるわけです。

ただ教育するのではなくて、何かの活動を進めながら、その周辺の人材を育成していく。近ごろよく言われるように、ディズニーランドは、ショーがあったり、乗り物があったりしますが、あそこでもてなしている若い人たちは、自分もパフォーマーだという気持ちを持っているわけです。だから、とても使命感がある。それを支えることに対する使命感が教育されてしまうわけです。こうした形を、このトリエンナーレの開催を通じて実現できればいいと思います。期間が2年と

いうのは実は短いのですが、トリエンナーレに向かって、アマチュアの皆さんが1回、2回と練習を積み上げていく、その期間にとっても充実感があるわけです。

さらに、その人たちに、場所を提供して、その場所で活動を行うための連絡体制などをつくってもらおうと、一つの公演を実現するために、どのくらいのエネルギーと熱意が必要かということがみんなに教育されるわけです。このトリエンナーレに向かって、こういう形でこの2年間活動していくと、一つの市民運動として成り立つと思います。

それから、例えばオルフのカルミナ・ブラーナなどは子どものコーラスまでありますから、子どもたちを公募して行くと、子どもたちが、大人と相当のレベルの芸術に触れ合うことで、そこでも教育が生まれます。このような取組を行うといいと思います。

私は美術のことはわかりません。特に現代美術は、素晴らしいものもあれば、難解なものもありますので、市民にとっては、展示されていても理解できない部分もあると思います。しかし、このトリエンナーレに向かって、人が何か活動を行い、進んでいくという体制をこの5月くらいまでの間に考えて、準備をして、公募するなら公募する、海外と交渉するなら交渉を始めるところまで持っていったほうがいいと思います。

○石上委員長　　そうですね。やはりそれを成功させることに価値を見出すことがモチベーションにつながりますね。自分たちが成功させるんだという気持ちにさせないと、難しいですね。

○齊藤委員　　そうしないと、芸術に向かい合って、触れ合うということには、なかなかありません。ですから、市民の声を待っていても、皆さんも雲をつかむような話でなかなか参加しにくいと思います。ですから、ある部分では、最初のトリエンナーレに対しては、骨子はきちんと主催者側が持って、それを決めて、そこに向けて皆さんが結集できるような体制を整備していく。そのために多少お金が使われてもいいのかと思います。

先ほど申し上げた300人の「第九」は、県の補助金を100万円いただき、あとは、1人が1万円ずつ出し合って行いました。会場費を含めても、それでできるわけです。私は代表でしたが、ここにこんな感動があるんだなど、改めて思いました。それは、300人ではなくて1万人の「第九」でもいいです。大坂城ホールでは既に開催していますが、別にあちらが実施しているからといって避ける必要はなくて、例えばアリーナを使って、客席に1万人の合唱団と、あとお客さんが1万人くらい集まるようなイベントにしてもいいです。このように、できるだけ人が動いて集まってくるような形をトリエンナーレで試してみるのもいいのかなど、勝手な意見としては思います。ただし、それは、「さいたま市」という名前を発信するのに、極めて役に立つのではないかと思います。少なくとも、国内に発信する上では役に立つと思います。

○石上委員長　　ありがとうございます。
少し議論を戻しますと、地域に根ざした文化芸術資源である漫画の項目に、漫

画文化にかかわる人材育成ということも書かれていますが、おかべ委員、何かございますか。

○おかべ委員　　ここを見て思ったのですが、漫画というものは、子どもが好きな分野ですから、放っておいても子どもは参入してきます。地道な草の根活動として、夏休みに漫画会館が、似顔絵教室などするのもいいですが、ここに、漫画文化にかかわる人材育成などと堅い言葉を使われると、少し疑問があります。子どもは、放っておいても漫画を読みます。放っておいてもやることは、放っておいていいんです。

○石上委員長　　なるほど。

○おかべ委員　　それよりも、唱歌やきれいな日本語、本当の音楽はこれなのだという、上からではない、子どもの感性を支える試みのほうにお金と時間を割いたほうがいいです。

○石上委員長　　ありがとうございます。

○井藤委員　　先ほど宮本委員からもありましたが、正しい日本語という言い方でしょうか、日本語は今どんどん乱れてなくなっていっているということですが、それと合わせて日本の古い文化もすたれていっているような気がしてなりません。この因果関係は私もわかりませんが、現状を見ると、そのような状況があると思います。もう一つは、これは行政にお聞きしたいのですが、開催体制の中に、準備委員会を設置するとありまして、その準備委員会で芸術監督を選任するとなっていますね。そうすると、先ほど少しお話が出ていましたが、やはり強烈なリーダーシップで引っ張っていくような監督であってほしいと思います。だからこそ、逆に言うと、このトリエンナーレの基本構想を先に決めておいて、それに沿ってくれるような監督を選ぶのでしょうか。そうしないと、監督がまた別の道に強いリーダーシップで進まれたら、それに従っていくということでは、それも少しおかしい話になってしまうと思いますが、その辺はどうなのでしょう。

○事務局　　ご心配はごもっともだと思います。芸術監督次第で、成功、失敗が大きく左右されると言われていますので、芸術監督選びは重要なポイントだと思います。ただ、闇雲にリーダーシップを発揮されて全く違う方向に進まれても、行政としても困ってしまいますので、行政としては、ある程度の方向性を考えておかなければいけないと思います。

一般的にトリエンナーレと言えば、いわゆる国際芸術祭で、そこへ見に行けば世界の最先端の芸術が見られるものということになると思いますが、このような内容だけだと、外から来て外に帰っていただけということになってしまう。そこで、さいたま市が行うトリエンナーレは、地元の地域資源等を使ったさいたま市オリジナルのトリエンナーレにしていきたいと考えています。

○井藤委員　　そうすると、市を中心に産官学で準備委員会を設置する中で、ここでの人選に

については、これは行政のほうで指名するのでしょうか。それとも、公募か何かですか。

○事務局　　今、市内のいろいろな関係団体の方々、市民代表の方等を含めて、お願いしたいと思っている方をピックアップして、20名から30名くらいにお願いしようかと考えています。

○井藤委員　　となると、その委員の方々の意見が、ある程度一致していないと、なかなか一緒になって議論できないですね。

○大久保委員　　このトリエンナーレというイベントの最終的な目的は、文化芸術都市さいたまの確立というか、創立ということだと思います。その中で課題になるのが、以前のアンケート調査の結果にありましたが、半数近い市民が文化芸術活動に参加していない、無関心であると結果にあると思います。このような人たちを振り向かせる、又は無関心な半数の人たちが全部参加してくれれば、さいたま市が2倍豊かになるわけですね。

こうした中で、無関心な半数層は何に関心があるのかということをおなりに考えると、結局、コンピュータやスマートフォン、ゲームなどに関心があると思います。ですから、今、事務局からも、最先端の芸術、アートというお話がありましたが、ぜひ、アートの部分としては、メディアアートと言われるものを取り入れていただきたいと思います。

まず一つは、先ほどの無関心層に興味があると思われるコンピュータ技術を駆使したもので、「芸術と科学技術の融合」といった視点から、コンピュータをはじめとしたいろいろなメディア技術を取り入れたミニシアターなどがいいと思います。例えば、シアターの中に、自分が入っていきたりいろいろな展示が考えられます。いわゆる美術展の作品ですと、享受者として絵と向き合っただけですが、そうではなくて、入っていくと、その絵が「ざざざー」と音を立てて変化してみたりするとおもしろいと思います。

あと、初台のオペラシティにICCという美術館があります。ぜひ、お時間がある方はお寄りいただきたいと思うのですが、そこでは聴診器を胸に当てると映像が始まって、あたかも自分の内面を見ているような錯覚にとらわれる作品や、300個くらいのLEDライトが部屋全面にあって、それが動くことによって宇宙体験ができたりする作品を体験することができます。こういったものがニューメディアと言われるものです。

こういうものは、いわゆるIT技術を使っていて、産業とも深く結びついていますから、経済効果も期待もできます。また、企業として社会貢献をしたいと考えている大手企業もたくさんありますので、そういう企業を惹きつけて協力してもらうことは可能だと思います。こうした技術は、無関心層を惹きつけるということもありますし、産業とすごく結びついていますので、ぜひ取り入れていただけたらと思っています。

○石上委員長　　今、参加型アートのお話がありましたが、体験するアートは、意外と若い人た

ちを惹きつけますね。意外とすつとなじめるものです。
話はずれますが、マスコミ的な視点から、村木委員、いかがでしょうか。

○村木委員 今、お話がありました無関心層は半分以上いると思います。例えば、「トリエンナーレ」という一つの言葉が無関心層に響くかという、全く響かないと思います。アイスクリームぐらいにしか感じないのではないかと思います。ここにいらっしゃる方々は芸術的な意識が高いと思うので、トリエンナーレに関しては敏感なアンテナを持っているからいいですが、125万人のさいたま市民に関心を持ってもらうためには、トリエンナーレとは何かなど、基本的なことを、まずは市民に広めていくことが必要かなと感じます。

例えば、基本施策の1から7を、どのようにして情報発信するのか。冊子を見ると、区のホームページによる発信などが例示されています。しかし、芸術に関心がある方は情報を取りにいけるとは思います。無関心な方々は降ってくる情報しか受け入れないと思います。

ですから、こういう芸術祭に関する情報を広く発信していく作業をこの2年間の間に進めないといけないと思います。岡山のトリエンナーレで何が行われていたのか、こっちに情報はほとんど来ないと思います。125万人のさいたま市民に対し、どのくらいの方々にこのトリエンナーレに興味を持ってもらえるのかという視点で考えると、この施策1～7プラスアルファ情報発信という方式を考えないと厳しいのかなという感じは受けます。

○石上委員長 具体的な提案やアイデアがありますか。

○村木委員 盆栽や人形などの、若い人たちから、少し遠い位置にあるものについては、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌を含めて、何かしらの広報体制を考えないと大変かなと思います。

○石上委員長 こちらが情報を降らせるわけですね。

○村木委員 こちらが降らせていくことを考えないと厳しいと思います。

○小林委員 具体的な取組を見る限り、非常に幅広い分野と幅広い層の方々を対象にしていると思います。これだけたくさんの施策がありますので、ともすれば、市民の方々にとっては、それぞれの施策が、独立した施策と受け取られてしまうのかなと感じました。このようなことでは、非常にもったいないと思います。これは次の運用面のステップかもしれませんが、これらの事業が全て一つのムーブメントとして市の内外に知れ渡るような施策が、必要だと思います。例えば、単純な発想で言うと、共通のシンボルマークでもいいですし、共通したテーマでもいいですし、そうしたムーブメントを起こして、これらの施策を展開していかないと、事業間の相乗効果によるPR効果が生まれないと思います。

もう一つ感じることは、芸術で言うと、クオリティの問題がすごく大事だと思います。やはり市の政策として実施する以上、一定のクオリティを担保し、それ

を維持していく必要があると思います。そうしたときに大事なのは、冒頭で副委員長がおっしゃったとおり、しっかりとした PDCA サイクルを構築した中で運営していかないと、なかなか根づかないと思います。今の段階では、この2つのことが重要なと感じました。

○石上委員長 ありがとうございます。

ムーブメントを起こすというのは、具体的にはどういうことでしょうか。テーマやシンボルマークという例示をされましたが。

○小林委員 トリエンナーレは、すごくシンボリックだと思いますし、こういった事業は情報発信にもなると思いますが、これを核にしていろいろな施策を展開していく必要があると思います。本当に幅広く文化芸術の底上げを図るような施策を、市全体として盛り上げていきたいという意志が一人ひとりの市民に伝わらないと、事業全体の意味を保てないのかなと思います。こうすることができれば、この事業全体の発信力の強化につながり、さいたま市では今こういう芸術の運動が起こっているということ、外部に発信していくことができると思います。

○石上委員長 先ほど齊藤委員がおっしゃったように、例えば、市民一人ひとりが担い手となり、つくっているようなイメージを醸成していくということでしょうか。

○小林委員 そうですね。それもありませんが、そこはコンセプトの話だと思うので、今後、話し合われたらいいと思います。一人ひとりがつくり上げていくべきなのか、本当に高いクオリティを市が提供していくのか、それは検討が必要だと思います。

○大久保委員 今の話と少しかかわってくるのですが、横浜のトリエンナーレと、性質が似たものとしては神戸のビエンナーレがあります。その違いとしては、横浜のトリエンナーレは、上からいろいろなイベントを起こして、それに関心がある人が見に行くといった国際的なイベントが中心です。それに対して神戸のビエンナーレは、国際的なイベントのほかに、お茶やお花などの市民による活動が同時並行的に進められていることが特徴です。

神戸のビエンナーレ的な展開をすることができれば、一般市民の運動の中にもこのトリエンナーレが浸透していく、いわゆるムーブメントのようなものになっていくのではないかと思います。私たちもトリエンナーレをつくっているのだという意識を持たせることができるのではないかと拝察しております。

○石上委員長 ありがとうございます。

五十嵐委員、鉄道はどちらなのかわからないのですが、いかがでしょうか。

○五十嵐委員 鉄道が文化芸術にどのように入っていけるのかと、いつも悩んでいるところです。鉄道博物館には、鉄道に関連する油絵で、非常にいい作品が1つありまして、その絵をぜひ見たいという声があるのですが、今は収蔵庫にあって、展示し

ていないのでお断りしている状況です。

また、音楽で言うと鉄道唱歌などもありまして、題材としては結構取り上げられると思いますが、このトリエンナーレにどのように入っていけるかということ、いろいろ悩んでいるところです。

情報発信についてのお話がありましたが、鉄道博物館では、2年前からフェイスブックを導入しまして、リアルタイムな情報発信に取り組み、若い世代に働きかけているところです。

去年、見沼の通船堀のことが掲示板に載っていましたので、見に行ったら、平日にもかかわらず、夏休み中の子どもたちや家族連れの方がたくさん来ていました。これはご存じの方もたくさんいらっしゃると思いますが、見沼代用水路と、その真ん中を流れる芝川の水位差を運河で調節して船を通すというものです。さいたま市にはいろいろと良いものがあると思いますので、こういうものをトリエンナーレの中で紹介するような機会があるといいと思います。

○石上委員長 そうですね。ありがとうございます。

あと15分くらいですが、計画29ページの、多彩な文化芸術資源の発掘・保護・活用ということも大きなテーマではないかと思います。この辺で何か、これを忘れていないかというようなご意見をいただければいいと思います。

○齊藤委員

さいたま市には、盆栽など、伝統的に積み上げてきた資源をもっていますし、一方で、ヨーロッパの最先端の舞踊などの文化芸術に触れることもできます。このような中で、トリエンナーレのようなイベントを開催する場合、その道の専門家たちがいろいろ考えて、最先端の文化芸術を世界から集めて展示するという方法と、それから、人が関わってアクティブに動けるものという2本の柱を立てたトリエンナーレを開催すべきではないかと思います。そうした時に、さいたま市の文化振興事業団は、客観的に見ても、プログラムを拝見すれば、さまざまなノウハウをお持ちだろうと思います。ですから、このような組織についても、しっかりと活用して、人をできるだけ動かすような事業展開をしていく必要があると思います。さいたま市に人を呼びこめるようなものとは何か、ここに力点を置いた施策展開を考えたほうがいいのではないかと思います。

高邁な芸術ももちろん必要です。必要ですが、視聴率で言うと、朝ドラは30%近い視聴率で、大河ドラマは15%くらいですが、美術、音楽などの芸術ものは視聴率で言うと1%です。さらに、現代音楽はその10分の1か100分の1くらいの視聴率です。

先ほど広報すべきだとおっしゃいましたが、NACK5もNHKも使えばいいのではないのでしょうか。ただし、それは、見せられる、話題にできるものを早くから提示していないと、マスコミは乗りようがない。ですから、NHKに働きかけるにしても、こういうものを見せることができます、こういうものを聞かせることができますということを、かなり早い段階で示すことができれば、目をつけた番組がどんどん取り上げるなど、相当な発信力が期待できると思います。ものすごくレベルが高いものもありますけれども、一方で、一般の人の心を動かせるような、見たい、聞きたいと思えるようなものも出していく。そういう観点で今

後のプロジェクトを考えていく必要があると思います。

例えば、プロジェクションマッピングなどを活用したアートはいいと思います。極めて多くの人と一緒に見られて、間口がとても広いと思います。これを、さいたま市にあるどこかの場所、空間を使って行い、しっかりと広報すれば、数万人が集まるようなレベルのものができると思います。私は、できるだけ人を集めたいという方針で、どういうプロジェクトになるかわかりませんが、発想していただくといいかなと思います。

○石上委員長 ありがとうございます。一般という視点で何かありますか。

○三須委員 人を呼び込んで経済的な効果をあげていくということですね。さいたま市文化芸術都市創造条例の目的である文化芸術都市を創造するためには、計画の重点プロジェクトにあるような経済の活性化とさいたまらしさの発信というものが、うまくかみ合っていないと目的は達成できないと思います。

例えばトリエンナーレで考えてみると、基本構想の中では、コアゾーンのメイン会場と、それを取り巻くサブ会場とか、そうしたイメージは既にあるわけですね。今後、メイン、つまり核となるものを検討する中で、芸術監督の影響が大きいとは思いますが、市としても地域に根づいたさいたまらしさに注目しなければいけないと思います。

先日、盆栽の伝道師を育成する盆栽アカデミーという事業に関する記事が新聞に載っていました。世界盆栽大会もあるわけですから、このような取組を通じて、人材を育成して、海外からも人を呼びこむなど、待っているだけではなく、積極的に展開していければ、さいたま市の文化全体のPRになると思います。併せて、トリエンナーレのPRも実施し、いろいろな仕掛けをしながら工夫をして展開できればいいと思います。

○石上委員長 ありがとうございます。私も少し意見を言わせていただきたいと思います。

議論を伺っていて、少し抜けているかなと感じるのは、やはりサブカルチャーというものをもっと活用していいのではないかという気がしています。日ごろ大学生と付き合っているわけですが、東京のビッグサイトで年に2回、コミケという巨大なイベントが開催されていて、そこでは、素人の方がつくった同人誌や、漫画のキャラクターのフィギュア、ゲームといったものが販売されています。そして、そこでキャラクターのコスプレをしたりする中で交流も生まれている。関わっていない人は、特殊なコアな人たちが活動していると思いがちですが、30代より下の年齢層ではかなり一般化していると思います。個人的には、さいたま市は、このようなイベントを横断的に組む場として、潜在的な能力が高いのではないかと思っています。例えば、漫画の舞台になっている場所、実際に漫画家が住んでいるなどの強みを活かしていくことができる。また、先ほど、黙っていても子どもは漫画を読むから支援は必要ないのではないかといったお話もありましたが、最近、漫画は、子どもが読むものではなくて、大人が読むものになってきています。

また、一方で、海外で頻繁に日本フェアなどが開催されていますが、半分以上

は漫画・アニメ関連となっていて、併せて日本の伝統的な文化等のPRをしているという状況です。見に来るお客さんの大半は、コスプレなどそういうものに触れたくて、日本フェアに来場しています。ですから、このような取組を通じて国際化が図れるでしょうし、サブカルチャーというものを中心に据えることも一つの可能性があるのではないかという気がしています。

あまり賛同が得られないような感じもしますが、いかがですか、マスコミ的には。

○村木委員 僕は、どちらかというサブカルチャーの分野の方が得意ですけど、トリエンナーレという言葉とサブカルは、ニアリーイコールには絶対にならないですね。

○石上委員長 そこはやはりメディアアートのようなものが、そこをつなぐ触媒になる可能性があるかなという気がします。

○村木委員 先ほど少しご意見があった、シンボルマークなどを公募するような話は、すぐに実施していいと思います。やはり、シンボルマークの募集を通じて、トリエンナーレのコンセプトなどを広く伝えることもできますし、多くの方に興味を持ってもらえるような気がします。

例えば、若者文化という視点で考えると、ゆるキャラ募集、デザイン募集のようなことは実施してもいいのかなと思います。

○石上委員長 キャラクターものはいろいろ展開していますよね。

○齊藤委員 流行しているものは、積極的に取り上げればいいのではないのでしょうか。質は保ちたい、ただし、それを宣伝するためには、マスメディアの力が必要となるわけで、マスメディアの注目を集められるように、ゆるキャラを活用してもいいと思います。

アニメについては、これはもう日本のカルチャーですよ。日本が世界に誇れる筆頭のカルチャーくらいに思いますが、場合によっては、トリエンナーレにおいて、このようなものも活用してもいいのではないのでしょうか。あまり高いところにトリエンナーレを設定してしまうと市民参加という部分が難しくなる。やはり、市民が参加して、人が集まれる、集まりたいと思えるようなやさしい切り口も必要だと思います。それで実際に行ってみたらハイレベルなものに触れることができる、そういうトリエンナーレになってほしいと思います。

○石上委員長 一応、予定の時間が近づきつつあります。最後に、全体を通してのご意見といますか、ご質問などがございますか。

○井藤委員 先ほどからトリエンナーレに関するご意見がいろいろ出ていますが、聴いたり見たりするよりは、参加型、つまり自分がつくるという方が、絶対におもしろいと思います。ですから、参加型という取組に重きを置いてみることもあると思います。

人形においても、もちろん、人形をきれいだからと興味があつて見るというの

もいいですが、それよりも、自分でつくと、子どもも大人もものすごく興味を示します。実際に、そうした催しを開催すると入りきれないくらいに人が集まってきます。

○石上委員長 人材育成というと、すぐに、何か職人さんを養成するようなイメージを持ちがちですが、そういうことではなくて、もっと広く捉えるということですね。将来のよき鑑賞者として、質の高い鑑賞者を育成するために、製作を体験してもらおうというようなことかと思います。

○井藤委員 関心を持ってもらうための最初の切り口だと思います。

○石上委員長 そうですね。ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

○おかべ委員 もう時間がないということでしたら、最後に1つ申し上げたいと思います。例えば、タレントさんでいいのですが、トリエンナーレの顔となるような人が必要だと思います。もしかすると、芸能人の方だと、長期間活動いただくのは難しいかもしれませんが、例えば、漫画・アニメという分野であれば、中川翔子さんとか、大宮の盛り場だったら土田さんとか、こういう1人のシンボリックなキャラクターの方が、いろいろ活動していただくとイメージが持ちやすくなるかもしれません。もちろん複数でも構いません。

○石上委員長 複数だとすると、1人メインに据えて、その周りに他分野の人を置くとかもいいですね。

○おかべ委員 例えば、鉄道担当、人形担当というようなこともあると思います。

○石上委員長 いいアイデアだと思います。ほかにはよろしいでしょうか。
では、一応、ご意見も出尽くしたようですので、以上で意見交換会を終了します。
ご協力、ありがとうございました。